



大西脳神経外科病院だより 第18号

ぶれいん

発行日:平成20年12月吉日

発行人:学術図書委員会

発行責任者:大西 英之

編集責任者:吉野 孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。

神経疾患の専門的・高度医療を実践する。

常に新しい医学の修得に励む。

救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。

地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

IT化の流れのなかで

副院長 (ITシステム管理室長)

たおもと かつし

埜本 勝司



IT化の流れの中で病院の信頼が更に高まることを期待しています。来年もよろしくお願いたします。

世はまさにIT化時代ですが、国の指導もあって医療の世界でもその流れは急速に進んできています。われわれの病院も流れに遅れまいと、昨年春IT化を一つの大きな目標に掲げてスタートしました。新しい大きな挑戦には常に多大のI初げと時間と費用だけでなくリスクも伴いますが、夢を託して始めたオーダーリング→電子カルテ・画像ファイリングシステム計画は当初の予定が大幅に遅れただけでなくその完成度において問題が多かったために、スタートから10ヶ月でトップの苦渋の決断により一旦撤退して仕切り直すことになりました。この間多忙な中であって精一杯の努力を続けてきた職員には申し訳ない気持ちで一杯ですが、味わった挫折感を再挑戦のI初げに変えて今年新たな出直しとなりました。今度は一から独自のものを作り上げる方式ではなく、すでに出来上がって多くの施設で利用されている信頼度の高いシステムの導入に切り替え、オー

ダーリング→電子カルテという段階的な導入でなく、一気にIT化に切り替えるというかなりの強攻策であります。3月にバンダーが決定し、4月初めにキックオフミーティング、以後全体会議、5月から機器搬入、医事データの移行作業、6月中旬から新医事会計システムの本稼働にこぎ着け、無難に船出しました。その後部門システムの連携・調整、各部署でのマスター整備、毎週運用に関するワーキンググループでの検討、7月からのDPC本稼働へ向けての動作訓練と息つく暇もなく突っ走りましたが、この間スケジュールの遅れもほとんど無く来れたのは院長の強力な指導力と、全職員が一つの目標に向かって進もうとする強い連帯感と、陰で連日遅く迄準備や全体の調整をしてくれているITシステム管理室の川村・中田両副室長の努力のおかげであります。心配していたDPCも大きな混乱無くスタートしました。全職員が電子カルテ操作法の訓練を頑張り、8月に入る



と医用画像ファイリングシステムの本格的な構築と電子カルテシステムへの連携作業が続きました。10月の電子カルテシステム本稼働に向けて9月には総合リハーサルが行われIT化もいよいよ山場を迎えます。医局カンファレンスルームに設置する2台の52インチ大型モニターによる検討会が始まりフィルムレス環境が整いました。また各部署とも本番に向けてシステムが滞りなく運用されるよう試行錯誤を繰り返しました。

10月17日、不安に満ちた本稼働も職員の努力の甲斐あって大きな問題もなく

日々の業務に移行することができました。業務の効率化や省力化といった経営課題はオーダーリングでカバーできるでしょうが、電子カルテシステムは医療の質向上のツールであり、情報の共有化が最大のメリットです。われわれはPCに使われるのではなく、これを利用し更に質の高い医療を目指して頑張っていくことが目的であります。稼働にあってはまだ問題もいろいろありますが、一つ一つ乗り越えてIT化の流れの中で病院の信頼が更に高まることを期待しています。来年もよろしく願います。

DPCについて

くが よしひろ
副院長 久我 純弘

本邦では、2003年4月から特定機能病院82病院を対象にDPC (Diagnostic Procedure Combination)と呼ばれる、いわば一日当たり疾患別定額払いという日本独自の方式が導入されました。これは米国のエール大学でQC (quality control)の目的で1969年研究が始められ、病院マネジメントの手法として用いられるようになったDRG / PPS (Diagnosis Related Group - Prospective Payment System)を参考にして、日本版に作り直したものと考えられます。2007年にはDPC対象病院360、DPC準備病院1069となり一般病床90万床の約46万床がDPCに関わることになりました。

医療技術の進歩に伴う医療費の増加に加え、日本が直面している人口の高齢化がもたらす医療費全体の増加のなかで、国の政策として、医療環境をどのように最適化していくかという問題に対する1つの対応方法としてDPCが導入されたと思われる。そのため、DPCの目的は「医療の質を上げる」とことと「医療費の増加の抑制」の2点であると思われる。医療費が膨らむ中、効率的に質の良い医療を提供する病院を残し、それができない病院には退場してもらって医療費を抑えたい。これがDPC導入の基本的な



DPCを導入することにより、さらなる技術の向上が必要である。

国のスタンスであろうと思われます。包括部分の点数は下枠内の式で示されます。

入院期間によっても1日あたりの点数は変化し、入院期間が長くなると1日あたりの点数は低くなります。

ある患者さんを何ら合併症無く、適切な入院期間で治療した場合、収益は上がりますが、逆に、様々な合併症を生じ、検査・投薬が多くなった場合、赤字になります。ですのでいかに合併症無く、治療を行うかが重要な点になります。これまでの蓄積された経験、データに基づき医療の質を確保しながら、医療経済もみずえた方策が必要となります。現在、その1つの方法として一般的な疾患に対しては、クリニカルパスが考えられます。今後もDPCでの結果を分析しながらクリニカルパスをより適切な形にしていく作業が必要にならうかと思われます。



診断群分類による包括評価＝診断群分類ごとの1日あたり点数×医療機関別係数×入院日数×10

ルネッサンスな北海道3泊4日の旅

看護部 主任 よねだ よしこ
米田 芳子

懇親会ではいろいろな職種の方々と話ができて、とても有意義な時間が過ごせました。

夏の暑さも本番を迎えようとしていた7月中頃、北海道へ行ってきました。そう、去年は大分県で開催された「日本病院脳神経外科学会」への参加のためです。（・・・で、その時の原稿を書くようにと任務を与えられたのですが、学会の内容・札幌脳神経外科病院との交流会・洞爺湖温泉・花火など・・・思い出いっぱい何を書こうかと今も悩んでいる次第です。）最初に私達が降り立った千歳は、7月でしたが半袖で少し肌寒さを感じるぐらいでした。神戸空港から出発する時も、伊丹空港に到着した時も空気？湿度？の違いに北海道の心地よさをとても感じました。さて学会ですが19、20日の2日間にわたり「ロイトン札幌」で行われ、とても広く綺麗な会場でした。どれを聞こうか時間の調整が大変なぐらい興味を持った演題がたくさんありましたが、この学会のもうひとつの魅力としては他職種の演題を聞いたことでした。専門的で難しい内容の演題もありましたが、どのような視点でメディカルの方々が患者様と関わっているのかを知る良い機会になりました。しかし、その中でも当院の発表は「素晴らしい」の一言でした。忙しい業務をこなしながら、プライベートな時間も費やし頑張った成果は十分に出せていたと思います。今回の結果にとどまることなく・・・といたいところですが、レベルを下げることなく今後も研究発表をしていくにはかなり高いハードルになったのではないかと、期待を抱きつつ不安も感じています。

来年は大阪での開催になりますが、大西脳神経外科で働く自分を客観視できるこのような場所に、ぜひ一人でも多くの方々に参加していただきたいと思います。追記：はるばる北海道まで行き、おいしいものもたくさん食べ、心もおなかも、もちろん頭もいっぱいになりました。ありがとうございました。

日本病院脳神経外科学会で学んだこと

薬剤部 主任 やまの はるこ
山野 晴子

薬剤部からは年末の院内研究発表会の内容に、その後の経過の推移を盛り込み「服薬指導率の改善 - 薬剤管理指導率の上昇に向けた1方法 -」をポスター発表の形式にして参加させていただくことになりました。しかし、演題を登録するところから課題になるとは想定していませんでした。薬剤師のみによる近畿学術大会と同様でいいのだろうと容易に考えていた結果、院長より論点の曖昧さを指摘され、その後も添削していただき、ようやく提出となったのでした。そして、学会一週間前には予行演習があり、そこでも枝葉が目立ち主幹が明瞭化されていないという問題点が挙げられました。さらに起承転結の整理やポスター構成の指導が坪本副院長からあり、やっと発表に至りました。

学会で、まさにこれからの過程を思い起こさせるセミナーとして「うまい学会発表のコツ」という浜松医科大学の先生のお話がありました。まず人に聞いてもらえる、見てもらえる前提を満たさなければ内容に足を踏み入れてもらえないのは当然のことではやはりこれには工夫が必要であるとのことでした。また、学会発表の日程表が届くまで口頭発表の多い学会であることが把握できておらず、ポスター発表では影が薄いことがわかり、事前にどのような発表形式が主流である学会かを確認しておくべきであることも勉強となりました。

学会全体としては、医療系、看護系、リハビリ系など様々な分野からの演題を聞き、普段とは違う視野から学ぶところが大きかったです。

最後に、このような全国規模の学会に参加できる機会を与えて頂き大変感謝しています。ありがとうございました。



来年は大阪での開催が決まっています。皆さんも何か発表してみたいはかがですか。

事務部長就任にあたって

おかだ じゅんや
事務部長 岡田 惇也



当院は開院以来、スタッフの質量の充実に努めてより高い施設基準を満たし、高度にコンピュータ制御された最新医療機器の導入で医療水準を高め、手術数を増し「いい病院」高位にランクされ、地域で信頼されるようになった。また、医療機能評価病院認定（システム的一种）により、プライバシー保護、接遇などを改善してきた。今年、「DPC」の診療報酬を請求できるようになり、「電子カルテシステム」の稼働で各職種は雑用から開放さ

れ、本来業務に集中できるようになる。一方、事務部長の業務は、採用、人事考課、価格交渉、福利向上、施設の改善等、「システム化」「PC化」できるものではなく、アナログの「人的関係」「交渉力」「思いやりと厳しさ」が要求される職種である。とても完璧に全うする自信はないが、近隣病院の先輩事務長のアドバイス、当院職員のご協力ですれでも満足してもらえよう頑張りますので、よろしくお願い致します。

DPCへの取組

たなか けいぞう
総務部 事務次長 田中 啓三

この7月から「DPC」という新しい入院費の制度を導入しています。この制度は、「診断群分類包括評価」と呼ばれ、最初に大学病院をはじめとする特定機能病院の一般病床に導入された制度で、当院は脳神経外科の単科病院でありながら、高い基準をクリアし、この仲間入りをしました。

従来の診療報酬は、診療行為を積み重ねて計算する出来高払い方式でしたが、DPC制度は、患者様の診断群分類（疾病）ごとに1日当りの診療にかかる費用（投薬・注射・処置・検査・画像診断等）が包括される計算方式です。

私たちは、この制度を採用することにより、今まで以上に、医療の質の

向上に努め、感染対策に取り組み、医療事故を防ぐ注意を十分に払っています。また、患者様の免疫力・回復力を高めるためにNST（栄養サポートチーム）を利用し、すべての職種が集まり、検討を重ね、治療をより良くすることに努めています。そしてクリニカルパス（入院診療計画書）を作成し、皆様の治療内容を説明しながら、ご納得頂いた治療を計画的・効率的に実施する体制を日常の業務として進めています。

私たちは、医療人として、日々、新しい医療を取り入れ、体制の充実に努力することを怠りません。

（これが「DPC制度」を導入する目的です。）

私たちは、医療人として、日々、新しい医療を取り入れ、体制の充実に努力することを怠りません。



いくつかの病院を経て今年の6月から勤務されている事務部田中次長。いつもにこやかな表情で落ち着いた雰囲気第一印象。

「院長が夢を追っている限りは私もそれをサポートし、先を見据えた人材育成をしていきたい」と少し強い口調で話を頂きました。

今年は、来年は

ITシステム管理室 副室長 なかた たかし 中田 隆司

今年の3月17日、約20年前の
新入社員の頃のようなフレッシュな
気持ちで入職しました。

当時はパソコンが一般家庭には無
く、企業にもオフコンやミニコン又
は汎用機と呼ばれる非常に高価で一
部の人しか扱わないコンピュータが
導入されていました。この頃の病院
では恐らくコンピュータとは無縁な
業界であったと思われます。そんな
時代にシステム開発会社へ就職して
プログラム作成のイロハからシステ
ムエンジニア（SE）の醍醐味を経

験してきました。

当院では「ITシステム管理室」
と呼ばれる部署に所属して、院内コ
ンピュータシステムの管理に当たっ
ています。

今年は電子カルテ導入という一大
イベントのため入職早々忙しい日々
を過ごしています。そして来年は病
院機能評価の更新審査のため忙しい
日々が続くそうですが、職員の裏方
として業務が滞ることのないようこ
れからもがんばっていきます。



大好きな仕事がんばります

臨床検査室 検査技師 きぬがさ ちひろ 衣笠 千典

私は大学を卒業してから4年間、大
阪の病院に勤務していました。最初は
何も分からず、涙を流しながらも必死
で頑張りました。そして就職してから
2~3年経って、ある程度自分の判断
が必要になると、“1つの職場しか知
らない自分の判断が正しいのか”とか
“この仕事しか知らない私は、本当に
この仕事に向いているのか”とか、そ
んな疑問が湧いてきました。外の世界
を見てみたいと強く思い、また別にや
りたいこともあったので病院を退職し
ました。

その後、ずっとやってみたかった研
究をするため、大学院に進学しまし
た。コツコツ実験を進める毎日で、学
会発表も良い経験になったと思ってい
ます。

そして全く違う世界なのですが、昔
からアナウンサーのような声の仕事に
憧れていた私は、ブライダル司会の勉
強をしたり、携帯電話のキャンペー
ンMCの仕事や選挙のうぐいす嬢なども
やっていました。これは本当に楽し

かったです。

大学院在学中と卒業してから数ヶ月
は、知人の会社で健診の仕事をしてい
ました。健診センター等に派遣される
仕事で、兵庫県北部や大阪、愛知、和
歌山、奈良、愛媛など各地に出張して
いました。旅行気分も味わえて楽し
かったのですが、中には重たい心電計
を学校に運び込んで何百人もの生徒さ
んの心電図をとるといふ少しハードな
仕事もありました。でも、ここでたく
さんの施設を見ることができたこと、
そして私が“ちょっとしんどいなあ”
と思うような仕事でも楽しんでやっ
ている人に出会ったことはすごく勉強
になりました。いろいろとやってみて、
“自分にあった環境を満喫したい、
やっぱり私は病院の検査技師の仕事が
一番好き”と思えるようになりまし
た。いろんなことをやってきたせい
で、年のわりに検査技師としての経験
は浅いのですが、大好きな仕事を頑張
りたいと思いますので、よろしくお願
いいたします。



忘年会の司会ありがと
うございました。



今年もたくさんの新人の方が入職されています、皆さん頑張ってください。

PACS可動！

さとう なおたか
臨床放射線科 主任 佐藤 直隆

2008年10月より、PACSが稼働しました。

PACSとはPicture Archiving and Communication Systemの略で、主に医療において使われるシステムを指し、CT、MRI、レントゲンフィルムなどの医療用画像データをネットワークでやりとりすることを言います。これにより毎朝行われている医局カンファレンスの形態が大きく変化しました。これまでは膨大なフィルムの中から必要なフィルムを選別していたため人手と時間が必要でした。しかしPACSが導入され画像をデジタル保存することで、瞬時に液晶大画面に表示が可能となり、①画像が見やすい。②スピーディな運用が可能 ③画像を一元化したことで容易に過去画像が参照でき

る、など多くの利点が挙げられました。テレビの画面いっぱい広がるがCTやMRIの画像を使ってのカンファレンスは利便性の面と質の向上に大きな役割を果たしています。

システムの構成は以下の内容です。

- Centricity PACS
- Advantage Report System
- PC (Work Station) × 2
- 電子カルテ EGMAIN-NX
- 大画面液晶テレビ × 2
- モニター切り替え機

52インチの大画面液晶テレビに映し出される画像は迫力満点です。



関心

インフルエンザの語源



「インフルエンザ」の語は16世紀のイタリアで名付けられた。当時はまだ感染症が伝染性の病原体によって起きるという概念が確立しておらず、何らかの原因で汚れた空気（瘴気、ミアズマ）によって発生するという考え方が主流であった。冬季になると毎年のように流行が発生し春を迎える頃になると終息することから当時の占星術師らは天体の運行や寒気などの影響によって発生するものと考え、「影響」を意味するラテン語：*influentia*（英語でいうinfluence）にちなんでこの流行性の感冒をインフルエンザと名付けた。この語が18世紀にイギリスで流行した際に英語に持ち込まれ、世界的に使用されるようになった。日本では江戸時代に長崎

から持ち込まれたインフルエンザウイルスが幾度か全国的に流行し、「お七かぜ」「谷風」「琉球風」「お駒風」など当時の世相を反映した名称で呼ばれた。古くから風邪、風疫とされるとおり、悪い風が吹いて人々を病気にするという認識があった。幕末にはインフルエンザの名称が蘭学者より持ち込まれ、流行性感冒と訳された。

パンデミック（大流行）が近年囁かれているが意外と危機感をもって、正しい予防策と知識を身につけている人は少ないようだ。「風邪が少し重くなった程度に考えていると思わぬことになる」と、多くの細菌学者が口をそろえて警告している。



編集後記

毎年12月は「今年も忙しく一年が過ぎたな」とか「一年が過ぎるの速いものだね」とか、同じようなコメントが職員の間で交わされる。

しかし！！今年はそんなコメントも交わせないくらい慌ただしくいろいろな行事で公私ともに一年を過ごしたような気がする。良いことも悪いこともあったが

忙しいと思えることは良いことだ。世の中不景気の煽りを受け職を失う人も多い中、自分がやりたいと思う仕事ができ、必要とされている実感が持てる。実にありがたいことだと思う…いや…さてよ、自分が必要とされていると思っているだけで、意外とそうでないかも…ちょっと心配になりながらも、また来年も「ぶれいん」の原稿を頼みますので皆さんよろしくお願いします。

(吉野)

